

お薦めの一冊

『房思琪の初恋の樂園』

林奕含 著 泉京鹿 訳 白水社 本体 2,000 円+税

文学は何かを救えるのか。

会員 守屋 典子 (45 期)



著者は亡くなる8日前に受けたインタビューの中で、本書について「誘惑された、あるいは強姦された女の子」の物語ではなく、「強姦犯を愛した女の子」の物語と言いたいと答えている。そして本書の冒頭に、著者は「これは実話をもとにした小説である」と書いた。

13歳の少女が50代の塾の教師に騙されてレイプされる。教師は「これが私の愛し方だ」と囁く。元々その教師に淡い気持ちを抱いていた少女は自分もその教師を愛していると思うことによって、自らの自尊心と折り合おうとする。「先生、わたしのこと愛してる？ 先生がほんとうに私のことを愛しているなら、それでいいから」。しかし、自分に言い聞かせようとしたその愛は無残な結末を迎え、少女は解離したまま2度と戻ってこれない。

当初、私は13歳の少女が自分をレイプした50代というはるかに年上の男を愛するなどということがあるのだろうかという疑問を抱いた。私は実父を含む男性に性的虐待を受けた子どもの事件を少なからず担当してきたが、これまで加害者を愛したという例は皆無だった。担当した事件の被害者の年齢層が低かったからだろうかなどと考えながら、この欄を書く準備をしていたとき、偶然インターネットでブラド夏樹氏による「ロリータの復讐 芸術文化賞受賞作家 その栄光と転落」という記事を読んだ。それによれば、フランスで今年になって『(性的)同意』という本が出版されたという。内容は14歳

だった少女が50歳の作家から1年間にわたって性的虐待を受けた事実、ペドファイルを公言しその体験を緻密に描写した作品を発表していたその作家を当時の文学界の多くの人々が容認し、政府が勲章まで与えていた事実を、被害者である著者自らが描いた実話。その本でも14歳の少女は50歳の作家に恋をしているが、著者はその中で子どもの同意がいかにも不確かなものかを描いているとされる。そして、被害者であった著者は「文学という同じ土俵で加害者である作家と戦いたかった」と述べている。

本書の著者も文学について問いかける。「書きたかったのはノンフィクション小説ではなく、社会の現状を変える気もなければその力もなく、いわゆる大きな言葉や構造に結び付けたいともわたしは思っていない。問いたいのは、1人の物書きとして、わたしのこんな変態的な、創作の、芸術の欲望とは何かということです」とし、「裏切ったのは文学を学んだ人間ではなく、文学そのものだったという作中の言葉をもってむすびのことばとしたい」とする。

文学は何かを救えるのか。著者は書くことで自らを救えなかった。誰にも救ってもらえなかった。作品は「天使を待つ妹」に捧げられる。

現実を前に無力である。

作品の中で少女は発狂し、著者は本書発刊後わずか2か月で自死したという。26歳。

ただただ切ない。